

第三十七回 武侯聖を定軍山に顕す、鄧士載偷かに陰平を度る

— 蜀の滅亡と姜維の最後 —

(解説)

姜維は、魏の皇帝曹髦がを殺されたことを聞くと、好機到来とばかり、また大軍を率いて斜谷から祁山に向かいます。このとき、鄧艾の部将王罐が、姜維に偽りの降参を申し出て蜀軍を攪乱しようとします。王罐は、前回、司馬昭に殺された王経の甥で、叔父の恨みを晴らしたいと姜維に言います。

しかし、姜維は王罐のたくらみを見抜いていました。王経の一族は皆殺しになったはずなのに、甥が生きているのはおかしいと考えたからです。

姜維は、王罐の内通を利用して鄧艾をわざと誘い込みます。鄧艾がやって来ると蜀の伏兵が襲いかかり、鄧艾は命からがら逃げていきました。王罐も逃走しますが、そのとき蜀軍の追撃を防ぐために「棧道」を焼き落としてしまいました。姜維は鄧艾を打ち破りましたが、「棧道」を焼かれたため、やむなく漢中に引きあげていきます。

関中から蜀への通路は、唐代の詩人李白が「蜀道の難は、青天に上るよりも難し」とう

たった難所です。中でも、垂直に切り立った岩肌に取りつく「蜀の栈道」は、断崖絶壁に穴をあけ、そこに杭を打ち込んでその上に板を敷いて通るといふ、聞くも恐ろしい難所中の難所です。かつて、漢の劉邦が楚の項羽によって漢中に押しこめられた時、劉邦は、蜀の栈道を焼いて関中には進出しません、つまり項羽に敵対しませんという意味表示をしています。その通路が焼き落とされたので、姜維は引き上げて行つたのです。

しかし、姜維は焼け落ちた栈道をつくりなおすと、またまた北伐に向かい、迎え撃つ鄧艾と戦います。

一方、後主劉禪は宦官黄皓のいいなりになって、蜀の政治は乱れていきます。姜維はみずから成都に赴き、劉禪に黄皓を除くよう進言しますが、劉禪はたかが宦官一人ではないかと取り合いません。

そこで姜維は、自らの身を守るとともに、あわせて軍糧を確保するため、遠く隴西地方に屯田して持久の計をとることにします。

姜維は、ここまでしばしば北伐に出撃しますが、さしたる成果をあげることができず、蜀の国力はしだいに衰えていきます。

一方、司馬昭は、最後の政敵であつた諸葛誕を倒すと、いよいよ本格的に蜀の征服にとり

かかります。司馬昭は、鄧艾と鍾会しゅうかいの二将を起用し、鄧艾には隴西地方の姜維きやういに当たらせ、鍾会には漢中に攻め込むよう命じます。姜維は魏軍が出陣したと聞き、急いで成都の劉禪に知らせます。しかし、劉禪は宦官の黄皓と遊樂ゆうらくにふけり、姜維の知らせをまともに取り上げようとはしません。

鍾会は漢中へ入ると、まず南鄭関なんていかんを取り、次いで陽安関やうあんかんへ向かいます。

(本文抄)

鍾会のみずから見回りにでて進むと、一つの山に出くわしたが、見れば、殺気が四方から立ちのぼり、陰気な雲が山頂をおおっている。鍾会は案内の者にたずねた。

「これは何という山か」

「これはぞ定軍山ていぐんざんといい、かつて夏侯淵かこうえんどのがここで戦死されました」と案内の者。

鍾会はこれを聞くと、慄然ぶぜんとして帰途きとについた。山の麓をまわったとき、ふいに激しい風が吹きおこったかと思うと、背後に数千の軍勢が躍りだし、風に乗って殺到して来た。仰天した鍾会は馬を飛ばして逃げたが、諸将たちで落馬した者は数えきれないほどだった。陽安関に逃げ込んでみると、誰一人として死んだ者はなく、転んで顔に傷をしたり、兜かぶとを

なくしたりしたただけだった。諸将が口々に言うことには、「黒雲のなかから人馬が殺到して来ましたが、近づいて来ても、人を傷つけることはなく、ただ一陣の旋風せんふうが吹きわたっただけでした」

鍾会が蜀の降将の蔣舒しやうじゆに「定軍山に誰かの廟はあるのか」と聞くと、蔣舒は答えた。

「廟はありませんが、諸葛武侯しよかつぶこう（諸葛亮）の墓があります」

鍾会は大いに驚き、「これは武侯が顕聖けんせい（靈験を顕すこと）されたにちがいない。私みずから出向いてお祭りしよう」と言った。

翌日、鍾会は供え物そなを取りそろえ、みずから諸葛亮の墓前に出向いて祭祀さいしをおこなった。祭祀が終わると、はげしい風はぴたりとやみ、陰気な雲も四方に散らばって、そよそよと清々すがすがしい風が吹きはじめ、しとしとと小雨が降りだした。しばらくすると、空はからりと晴れあがったので、魏兵は大いに喜び、みな礼拝らいはいして本陣へもどって行った。

その夜、鍾会が陣幕のなかで机にもたれて、うとうとしていると、突然、涼しい風が吹きわたるや、綸巾りんきん（青い糸で作った隠者の頭巾）をつけ羽扇うせんをもち、鶴氅かくしよう（鶴の羽で作った上衣）をはおり、黒い紐飾りひものある白い履くつをはいた人物が現れた。顔は冠かんむりを飾る玉のように白く、唇は紅べにをさしたよう、凜々りりしい眉まゆにぱっちりした目、身の丈は八尺、飄々ひょうひょうとしてさながら

仙人せんじんのよう。その人物が陣幕のなかに入って来たので、鍾会は立ち上がったはずねた。

「どなたでしようか」

その人は、

「今朝は丁重なあいさつをいただき、かたじけない。私は一言ひとこと伝えたいことがあって来ました。漢の命運めいうんが衰えたのは天命ではあるが、蜀の民衆は罪もないのに戦乱にあい、まことに哀れなありさまです。あなたは蜀に入ったならば、くれぐれもみだりに人々を殺さぬようにしてください」

と言いおわるや、立ち去った。

引き留めようとして、鍾会のはつと目が覚めた。なんと夢だったのである。

鍾会は諸葛亮の霊だと気がつき、驚きに堪たえなかつた。そこで、前軍に命令を伝えて、「保国安民ほくあんみん」の四字を書いた白旗を立てさせ、行く先々でみだりに人を殺した者は死刑にする、と申しわたした。

かくて、漢中の人々はことごとく城を出て魏軍を出迎え、鍾会は一人一人にやさしい言葉をかけ、毛筋けすじほどの略奪りやくだつも行わなかつた。

(解説)

こうして、漢中は鍾会によって平定されました。

諸葛誕しよかつたんや高貴郷公こうききやうこうの挙兵などの動乱が続いたため、今回の蜀征服戦は失敗するとの意見が多数を占めていましたが、後に呉の丞相じやうしやうとなる張悌ちやうていは、冷静に敵国の情勢を分析して次のように述べています。

かつて曹操はその威勢いせいが天下を震ふるわせはしましたが、それは権謀術数けんぼうじゆつすうによるものであり、民衆は畏おそれはしても、その徳に心を寄せたものではありません。曹丕そうひ・曹叅そうさいもそのやり方を引き継いで、民衆の心を失いました。これに対し、司馬氏は政治の過酷かこくさを除いて民衆に恩恵ひろを拡げ、民衆を苦しみから救ってやっています。民衆は司馬氏に心を寄せ、淮南わいなんの反乱や高貴郷公の死によっても天下に動揺どうごが起こらなかつたのがその証拠です。一方の蜀は、宦官かんがんが政治を牛耳ぎやうじり、しかも必要のない軍役ぐんえきに民衆も兵士も疲弊ひへいしています。司馬氏が勝利を収めるのは疑いありません、と主張します(『三国志』孫皓伝の注「襄陽記」)。

張悌ちやうていは権力側からではなく、民衆からの視点で分析をしています。民衆の思いが、時代の趨勢すうせいを決していくという民衆史観ともいうべき見解を述べています。

諸葛亮が霊となつてあらわれ、罪もない民衆をむやみに殺すことがあつてはならないと述

べ、それを受けた鍾会が「保国安民」ほくあんみんの旗をたてて民衆保護の姿勢を示すと、漢中の民衆が喜んで魏軍を出迎えます。その記述には、平和を求める民衆の切なる願いが表現されています。

一方、姜維は、隴西ろうせいから撤退して劍閣けんかくに拠よります。ここで、鍾会と鄧艾の間で意見が分かれます。

鄧艾は、一挙に成都せいとを襲えば姜維は救援にかけつけるので、その隙に劍閣を攻めとることができると進言します。鍾会は口ではいい案だと言いますが、内心は鄧艾を馬鹿にし、正攻法で劍閣を攻めます。そこで、鄧艾は成都への奇襲作戦かんこうを敢行します。

(本文抄)

鄧艾はその夜のうちに命令を下し、陣営を引き払って、ひそかに陰平いんぺいの裏道めざして軍勢を進め、劍閣から七百里離れた地点に陣をしいた。

ある者が「鄧艾が成都の攻略に向かおうとしております」と知らせたところ、鍾会は鄧艾は愚か者だと笑った。

ここで、鄧艾は密書をしたため司馬昭に報告するとともに、諸将を集めてたずねた。

「私はこれから敵の隙をついて成都に攻撃をかけ、おまえたちとともに不朽の功名を立てたいと思うが、ついて来てくれるか」

「ご命令とあらば、万死も厭いといません」と、諸将は口々に答えた。

そこで鄧艾は息子の鄧忠とうちゆうに五千の精銳をあたえると、全員、鎧を身につけず、それぞれ斧のみや鑿のなどの道具を手にとって、切り立った崖がけに出くわせば、山を削けずつて道を開き、橋さんじゆうに栈道をとりつけて、行軍こうぐんの進路をつくるよう命じた。

そのうえで、鄧艾は三万の軍勢を選抜し、それぞれに乾飯ほしいいと縄を持たせて進發した。百里余り進むと、三千の兵士を選んで陣營を築かせ、また百里余り進むと、三千の兵士を選んで陣營を築かせた。

この年の十月、鄧艾は陰平から軍勢を進め、切り立った崖や険けわしい谷の中を、二十日余りかけて七百里余り行軍したが、すべて無人の地ばかりだった。

鄧艾軍は途中で数十の陣營を築きながら進んだため、残ったのは二千の軍勢にすぎなかった。さらに前進して摩天嶺まてんれいという山に行き当たったが、ここは馬で進むのは無理だったので、鄧艾は歩いて山をよじ登った。すると、鄧忠とうちゆうと先を行く勇士たちが声をあげて泣いているので、鄧艾とうがいがわけを聞くと、鄧忠は答えて言った。

「この山の西側は断崖絶壁で、とても切り開くことはできず、これまでの苦勞が水の泡になると、泣いていたのです」

鄧艾は「わが軍はここまで七百里余りも行軍して来たのだ。ここを越えれば、もう江油こうゆ（四川省平武県）だ。どうして引き返すことができようか」と言い、そこで兵士たち呼びかけて言うには、

『虎穴こけつに入らずんば、虎子こじを得ず』だ。いっしょにここまで来たのだから、手柄をたてて富貴ふうきをともしよう」

兵士たちは声をそろえて答えた。

「どんな命令にも従います」

鄧艾はまず武器を投げ下ろすと、毛氈もちせんで自分の体を包み、真つ先に谷へ転がり落ちた。副将のうち毛氈のある者は身を包んで転がり落ち、ない者はそれぞれ繩を腰にくくりつけて、木につかまりながら次々に下りていった。こうして鄧艾・鄧忠をはじめ二千の將兵、先手で通路を切り開いた精銳は全員、摩天嶺を越えたのだった。

鄧艾は、毛氈(フエルト)で身体を巻くと真つ先に谷へ転がり落ちます。源義経みなもとのよしつねの「鴨越ひよどり

え」を遥かに凌駕する「摩天嶺越え」で、ひたすら道なき道を切り開いて成都に迫ります。

鄧艾率いる魏軍の突然の出現に、劉禪はただおろおろするばかりです。南方へ避難しようというものや、呉に逃げ込もうというものなど、一向に意見がまとまりません。

しかし、譙周しやうしゅうが、亡国の天子が他国に逃亡して天子でいた例はありませんと魏に降るよう勧めたので、劉禪は無抵抗で降参することを決意します。そのとき、劉禪の子の劉諶りゅうたんは、城を枕まくらに討ち死にしようといいますが、劉禪は聞き入れません。そこで劉諶は、自分は死んで先帝にお目にかかるといつて自決します。

翌日、劉禪は手を後手にしぼり、鄧艾に降参します。鄧艾は劉禪を扶たすけおこし一緒に成都へ入城します。成都の人々は、香を焚たき花を捧げて魏軍を出迎えます。鍾会の魏軍を歓迎した漢中と同様、成都の人々の胸にも、降伏の無念さよりは、長年続いた戦いがやっと終わったという安堵感あんどかんがあったのでしよう。

譙周は、以前にも劉璋りゅうしやうに劉備への降伏を勧め、今回も劉禪に魏への降伏を勧めています。

後世、彼は姦佞売国の徒とよばれ、「大義名分論」「正閏論」の立場から強く非難されます。南宋の朱子の著書『資治通鑑綱目』は、魏を正統とする『資治通鑑』をもとにしたものです。

が、三国時代のところだけは蜀を正統に書き改めています。魏が中国の過半を支配したという現実ではなく、自らの思想にあわせて歴史を論じる時代になっていきます。

譙周が劉禪に、亡国の天子が他国に逃亡して優遇された例はありません、呉に行けば臣下として服従せねばなりません、小国の呉に対して臣と称するよりも、大国の魏に対して臣と称するほうがましでしょうと述べたのは、現実的な価値判断です。

蜀の豪族出身の譙周にとつて、外来政権である蜀漢しよくかんの「漢室の再興」という国是こくぜは、はなはだ迷惑な理想主義の押しつけでしかなかったのでしょうか。

こうして蜀は滅亡しますが、魏の都洛陽に送られて安楽公あんらくこうに封じられます。劉備が蜀を占領して、ちょうど五十年目のことでした。

姜維きやうゐは劉禪が降伏したことを知らず、劍閣けんかくの砦を死守していましたが、そこへ、成都から使者がきて降伏の勅令ちよくれいを伝えます。姜維軍の将兵は、決死の戦いをしているのになぜ降伏したのかと慟哭とうこくします。姜維は彼らに、私に蜀を再興する計略があると言い含め、鍾会に降参こうさんします。鍾会は喜んで姜維と兄弟ちよていの契りを結び、以後行動をとにもするようになります。

一方、司馬昭は、鄧艾とうがいが蜀で自立するのではないかと疑い、鄧艾とは不仲ふなかの鍾会に監視を命じます。鍾会は姜維と相談したうえで、鄧艾が謀反を企てていると司馬昭に報告します。

司馬昭は、鍾会に鄧艾を捕えるよう命じ、みずからも大軍を率いて蜀へ向かいます。しかし、司馬昭が蜀へ向かった本当の理由は、鄧艾ではなく鍾会の謀反を警戒していたからでした。

鍾会は、衛<sup>えい</sup>罐<sup>かん</sup>に鄧艾を捕らえるよう命じます。衛罐は、鄧艾以外の者は罪に問わないと言つて部将たちを降伏させると、鄧艾を捕らえて洛陽へ送ります。鍾会は、鄧艾の軍勢をあわせて強大になると、姜維と相談して蜀で自立しようと図<sup>はか</sup>ります。

姜維は内密で劉禪に手紙を送り、蜀の再興を図っているので、今しばらく辛抱<sup>しんぼう</sup>するようにと言います。

そこへ、司馬昭が大軍を率いて西へ向かっている、との知らせが届きます。鍾会は、さては事が洩<sup>も</sup>れたかとびつくりし、姜維とともに謀反を決意します。

鍾会は諸将を宴会に招き、ともに司馬昭討伐<sup>しばしやう</sup>に立ち上がろうと訴えますが、諸将は誰も従おうとしません。そこで、鍾会は諸将を宮中<sup>きゆうちゆう</sup>に閉じ込めます。姜維は諸将が従わないのを見て、鍾会に彼らを殺すように言います。これを洩<sup>も</sup>れ聞いた諸将は驚き、外にいる部下と連絡をとり、彼らを宮中に攻め込ませません。そして、鍾会は斬り殺され、姜維は「わが計成<sup>けい</sup>らず、これも天命だ」と言つて、みずから首を刎<sup>は</sup>ねて死にます。時に五十九歳でした。

姜維は、鍾会に謀反の意図があることを見抜き、それを利用して蜀を復活させようとしま

したが、最後は失敗し、これも天命だといって死んでいきます。諸葛亮がその才能に期待した姜維ですが、頓挫とんざしたとはいえ最後まで自らの使命に生き抜く姿を示しました。

『三国志』姜維伝は、彼が粗末そまつな家に住み、余分な財産を持たず、妾しよを置く不潔さもなく、音楽を奏させる楽しきももたず、あてがわれた衣服をまとった、と諸葛亮と同じように清廉潔白な人物であったことを記しています。

このあと『三国志演義』は、洛陽らくようでの劉禅のエピソードを紹介します。

#### (本文抄)

司馬昭は宴会を開いて(劉禅を)もてなし、まず魏の音楽を奏して舞踊ぶようを披露ひろうすると、蜀の役人はみな悲痛なようすだったが、劉禅だけは喜色きしよくを浮かべていた。

ついで司馬昭が蜀の樂人がくじんに命じて蜀の音楽を演奏させたところ、蜀の役人はみな落涙らくるみしたが、劉禅だけはますます喜んでいて。酒宴しゅえんが酣たけなわにさしかかったころ、司馬昭は賈充かじゅうに言った。

「情けないことだ。これでは、諸葛亮が生きていたとしても、この人を輔佐ほさして国を保つことは無理だったろう。ましてや姜維きやういなどではどうにもならない」

そこで司馬昭は劉禪にたずねた。

「蜀が恋しくはありませんか」

「この地は楽しいので、蜀のことは思い出しません」と劉禪。

しばらくして劉禪が手洗いに立つと、げきせい 卻正が追いかけて来て言った。

「陛下、どうして蜀を思い出さないとお答えになられたのですか。もし、また晋公しんこう（司馬昭）がおたずねになりましたら、どうか涙を流して、『祖先の墓が遠い蜀の地にありますので、西を向いては心悲しく、蜀を思い出さない日はありません』とお答えください。そうすれば、晋公は必ずや陛下を蜀に帰してくれるでしょう」

劉禪はすっかり胸にきざんでえんせき 宴席にもどり、酔いが少しまわったところ、司馬昭はまたたずねた。

「蜀が恋しくはありませんか」

劉禪は卻正にいわれた通りに答え、泣こうとしたが涙が出ないので、しきりに目を閉じてみせた。

と、司馬昭は言った。

「なんとまあ、卻正の言葉にそっくりですな」

劉禪はぱっと目を見開き、びつくりしたように司馬昭をみつめて言った。

「おっしゃるとおりです」

司馬昭や左右の者はどっと吹き出した。司馬昭はこれ以来、劉禪のばか正直さに心をゆるし、まったく疑いを持たなかった。

### (解説)

三国志関連の書籍を読むと、劉禪の前に枕詞まくらごころばのようにつくのが「愚かな」とか「暗愚あんぐ」という言葉です。劉禪の憎みにくようのない人柄を示すのが、上の本文抄です。このように、劉禪は凡庸ぼんような人物ですが、暴君型ぼうくんがたでも遊蕩型ゆうたうがたの君主でもありません。また、害毒がいどくをまき散らす宦官・外戚・権臣まわも周りにはいませんし、黄皓こうこうという宦官かんがんはいましたが、後漢末ごかんの宦官と比べれば大変おとなしいものです。

劉禪の凡庸さは、劉備が四十代後半に荊州けいしゅうにいた時に生まれた子で、親の苦勞とともに味わうことなく育ったことにもよるのでしょう。

劉禪は、劉備の死後四十年間皇帝の地位にありました。それ以前で、劉禪より在位年数が長いのは前漢ぜんかんの武帝ぶていだけです。これを、皇帝が目まぐるしく変わった魏・呉と比べれば、実

は蜀の政治は大変安定していたということもできます。本文抄のようなエピソードが先行してしまふ劉禪ですが、彼の人まかせの性向が、かえって蜀の政治の安定に寄与したという面があるのかもしれない。

陳寿は劉禪を評して「後主は賢明な宰相に政治をまかせているときは、道理に従う君主であつたが、宦官に惑わされてからは暗愚な君主であつた。伝に『白糸はどうにでも変わるものであり、ただ染められるままになる』とあるのは、なるほどもつともである『正史・三国志』後主伝、井波律子訳、筑摩書房」と書いています。

ともあれ蜀は、お家騒動や篡奪の動きで揺れ動くということはありませんでした。